

第1章 建築の危機

1 全てが建築である

ハンス・ホライン「全ては建築である」

主体を取り囲む環境は、フィジカルなものであれヴァーチャルなものであれ、全て建築と呼びうる、また、環境は主体の感覚によって生成されるということであり、フッサールの現象学的還元とも共振している。

2 脱構築＝脱建築

デリダのフッサール批判

ドラッグや電子テクノロジーによってどんなに自由に、非物質的に建築が出現しようと、その出現する建築自体が依然として構築的であるならば、何も変わったことにならない。

→「**構築**」という視点から**建築史を見直すべき**

2章 建築とは何か

1 物質

建築を構築と言ひ換えることで、「全てが建築である」状態へと拡散してしまった建築を、再び収束することも可能。「**構築とは特定の主語がある概念**」→主体によって構築されるものが建築であり、それ以外のものは建築ではない。

2 シェルター

「建築とはシェルターである」→「構築されたシェルターが建築である」

3 空間

主体と客体という関係があるとき、そこには空間が存在する、すなわち空間とは主体と客体との関係である。

空間≠建築

建築を空間として見ることは建築の幅を広げ、建築と他の領域を結びつけてはくれるが、建築が構築であり、意思の産物であると言うことを人に忘れさせてしまう。建築とは空間的な構築である。

3章 構築

1 洞窟

洞窟は人が構築したものでないため、建築とみなされないが、洞窟には建築的性質がある。

1 形態を持たない　2 迷路性　3 時間の非分節

2 垂直

巨石の出現（ストーンヘンジ）

洞窟とは対照的な建築的な特質

1 形という概念→建築とは形であるという今の建築家をも毒し続けている信念

2 垂直という新たな建築的 concept の出現→**人間という主体によってその建築が構築されたことが垂直性によって暗示される**

3 構造

洞窟のように明確な構造形式がなくても建築が重力を克服することは可能であるため、全ての構築に構造があるというのは間違っている。

しかし、構築にとって最も重要なことは、「**それ自身が紛れもなく構築されたものであることを表現すること**」であるため、全ての構築は構造を欲し、結果として全ての構築は構造を表現する。

4章 構築と拡張

1 多柱室

→構築を拡張するための一形式。柱が反復され、構築が拡張される。

しかし、構築の本質は外部と構築物の対比にあり、反復による拡張はその対比を失わせた。

2 比例

拡散しようとする構築に、あるまとまりを付与する装置→比例、台座、ルーフ

比例→反復による危機に陥らせることなく構築を拡張せしめる手法

ひとつの構築物という具体的なおが、比例関係という数式に**抽象化**されることで、拡張が可能になった

3 台座

パルテノン神殿に強い象徴性を与えているのは、神殿の敷地であるところのアクロポリスと呼ばれる小高い丘そのもの

4 ルーフ

アエディクラ（ラテン語で家型）と呼ばれる勾配のついた屋根

建築に上からまとまりを与える装置機能的、構造的な必然はなく、装飾的なものであった。

5章 構築と自然

1 生贄

自然を殺すことの恍惚、そして罪悪感　このパラドクスは構築の永遠のテーマ

構築とは自然を殺傷する行為であったため、パラドクスを解消するために生贄という儀式が行われた。

2 植物

ギリシャにおいて、構築の罪は、植物によってカムフラージュされた。

「樹木起源説」　→ウィトルウィウスなどによる自然の木が円柱の起源であったとする説であり、構築という反自然な行為を「自然な行為」と正当化するために用いられた。

・19世紀のアールヌーボ洋式のテーマも自然

・フランクロイドライトの有機的建築　・1970年以降　アトリウム

植物は依然として構築という罪を隠蔽する最高の道具である

3 身体

モデュール by コルビジェ→人間の身体寸法にプラスしてフィボナッチ数列を導入

フィボナッチ数列が自然界の秩序と深い関係を持つことを知っており、モデュールの「自然性」すなわち自然界との類似を基礎とするその正当性を補強するため。

6章 構築と主体

1 家形原型説

サマーソン　家型という建築エレメントを媒介にして、ゴシックと古典主義の間に通底するものを見出そうとした。家型を一種の内部空間として記述しており、この特性ゆえに家型は古典主義、ゴシックの両者の原型たりえた。

2 外部対内部

ローマ以降の最大の建築的関心→外部形態と内部形態との断絶を、いかにして解消するかという問題

三角形と円を用いて分断、拡散から建築を救い出そうとした。（パンテオン神殿は球という幾何学形態が内部、外部を支配する）

7章 主観対客観

1．主観的救出と客観的救出

ローマ以降の建築の最大の問題点として、内部と外部の分裂が挙げられる。

内部の出現、複雑化、拡大はそこに一つの迷路が生成されることを意味した。迷路から主体を救出ための方法の集積が建築士であったともいえる。

主観的方法→迷路の内部に閉じ込められた主体を直接的に救出する方法

客観的方法→迷路の外からの視点によって迷路に秩序を与えて迷路の不透明性を解消する方法

2．ローマという統合

主幹的方法と客観的方法は、基本的に対立するものではなかった。互いに補い合いながら建築に秩序を生成していった。それぞれの方法が要求する空間の質、形態は異なりながらも、その差異こそが多様な建築を生み出していた。

3．ゴシックという主幹

ゴシックは西洋建築の中で、異物なものとして捉えられていた。→西洋建築史の中で唯一反古典主義的な相貌を示す建築洋式だったから

家型という形相を無数に集積していくゴシック空間はまさしく個物形相論を空間化したものだった、→パルテノン神殿とは対極的。

8章 建築の解体

1 透視図法

→立体を平面の上に、それが人間の目に映るのと同じように表現する手法（遠近法）

ゴシックの教会堂の入り口からは奥行き方向に向かって遠近法的に徐々に縮小されていく構図が見える→この構図が遠近法であり、中世の中からルネサンスの芽が生み出されていった

この透視図法が建築の解体と衰弱の契機となった。

2 書き割りとテクノロジー

第一の解体　建築から絵画の独立し、書き割りと呼ばれる舞台の背景画が出現した

第二の兆し　テクノロジーの独立→コベルニクス、ガリレオらが生み出した新しき客観に対し、建築はゴシックの一つ前に戻っただけであり、新たな客観を見出すことができなかった

ルネサンスは都市の時代でもあった。都市空間構成の主役である建築は、都市空間を構成する壁として、あるいは一種の舞台装置としての役割を、建築は期待されるようになり、**書き割りとしての性格を強めて行った。**

なぜなら建築を通じて、新たな客観性、普遍性に到達できるという考えは、建築家の中でも衰えつつあった。

3 絶対的な主観

建築自身を、彫刻の延長、拡張として捉える「彫刻の建築家」ミケランジェロ
客観性の追求を建築の目的とした「建築家」を拒否し、全ての客観性、秩序を批判することからスタートし、透視図法は主観の抑圧にしか過ぎないと考え、粘土模型によるスタディを繰り返した。
自己の主観のみを通じて、直接的に普遍に到達できるという確信が、彼の芸術を支えていた。

9章 普通の終焉

1 普遍対逸脱

ミケランジェロの方法を継承した建築家たちはしばしば批判の対象となった（マニエリスム）。建築が公的なる創造であるが故に、彼らの主観性は批判されなければならなかった。

マニエリスムの後にバロック様式の時代が訪れる。

バロック様式：　制度に奉仕する立体的な書き割りであったため、容易に政治的権力に奉仕する建築様式へと変化した。反宗教改革の様式であり、絶対王政の様式

2 新古典主義

啓蒙主義の建築的な対応物は新古典主義であった
新古典主義の最大のジレンマ　「建築に化学（建築にある客観的な根拠）を適用しようとしながら、実際のところ古典主義という「古いルール」以外の客観的な基準を発見できなかった」

3 幾何学と自然

ヴィジオネール＝幻視家によってこのジレンマが打ち破られる

「幾何学の純粋な適用によって作られた建築」

しかし彼らのヴィジョンが社会的に認知され、実現を見るのは、2つの制約　物質性と社会性が真に解除される20世紀であった。

4 自然と崇高

17世紀はシステムそれ自体のみ関心があったのに対し、18世紀はシステムに外部があることを発見した。

「崇高なる自然という概念」

人間はいかに理性を駆使しようとも、決して普遍的な世界を獲得することができないということをカントは解いた。

→中世の神に変わる普遍性を追求してきた、ルネサンス以来の建築的営為に対する批判

10章 建築のモダニズム

1 自然の逆転

ギリシャから18世紀に至るまでの建築における最大の課題「**建築という構築物を、いかにしたら普遍的なるものたらしめることができるか**」

（すなわち構築の主体としての客観性＝普遍性を問うということ）

ギリシャ以来、構築物はその外部に対して、圧倒的に優位な関係を維持してきた。

しかし18世紀末にこのテーゼが反転される**「美しく、崇高にして、安全なものは自然という名の外部である」**

→「自然に帰る」ことが構築物に求められた。

2 社会の発見

構築の罪を隠蔽するために自然という衣装でカムフラージュされる。構築がその外部（自然）に対して優位にたち、外部を侵略するという構図は、少しも変わることがなかった。

4 建築の否定とミース

・建築を透明にして消し去る

・建築の構築を利用者という不特定の存在に一切委ねるユニバーサル・スペース

これらによってミースは構築批判を見事にかわしたかに見えた。

5 構築を超えて

ガラスの箱は透明ではなく、ユニバーサルスペースは最も拘束的で抑圧的な構築に他ならない→**建築とは構築以外のものでは決してありえない。**

構築はいよいよ深刻な危機に瀕し、かつてないほどに様々な批判に晒されている。

・人間に今必要なのは物質的なものをさらに構築することではなく、非物質的な構築である

・構築そのものが抱える自己中心性が環境破壊の元凶である

構築の本質的な批判というものが可能であるか、それは建築という本来的に構築的である制度の内側においても可能であるのか。そして構築に変わる建築の方法論というものが、はたして可能であるのか。

我々はいま、この問いの前に立たされている。